特240
372

世界新秩序と日本の外交

第九篇

伊藤述史
白鳥敏夫

財團法人
日本文化中央聯盟

始

特240
372

262

國民自覺叢書

—9—

世界新秩序と日本の外交

財團法人

日本文化中央聯盟

昭和六年五月廿日

今次大戰の性格　伊藤述史（一）
日本外交の精神　白鳥敏夫（三五）

今次大戰の性格

伊藤述史

目次

一　世界の轉換期……（一）
二　前世界大戰の本質……（六）
三　今世界動亂の本質……（十七）
四　世界の新體制……（二十七）

一　世界の轉換期

茲に「世界動亂の意義」といふことを申上げたいといふ理由は、この頃新聞を御覽になつても、また雜誌を御覽になつても、現在吾々は世界動亂の眞中にあるのだとか、或は世界變轉期だとか、いろいろなことを書いて居ります。もう誰もがさういふことが口癖になつてゐるのでありますが、それが果してどういふ意義を持つてゐるのだらうかといふことに關しては、あまりはつきりした考を持つてゐる人が少い。然しその意義を明かにしないで、徒らに世界動亂であるとか、また世界の轉換期であるとかいふことを申すと、それが思想の混雜を來しまして、世界動亂が延いて思想動亂になりはしないかと思つてゐるのであります。

さういふ意味に於きまして、現在のやうな各方面の社會生活、國家生活に於て、種

々の思想が現はれる時に於きましては、尙更現在の世界動亂の意義はどういふものであるかといふことを、先づ明かにしてかかつて、然る後にその他の方面、或は國內の情勢であるとか、また文化の情勢であるとか、經濟方面であるとか、各方面におし擴めることが必要ではないかと思ふのであります。さういふ意味で、極く簡單に、現在の世界の情勢、世界の動亂が、一體どういふものであらうかといふことに對しまして、私の考を申上げてみたいと思つてゐるのであります。

世界の現在の狀態が非常な動亂狀態であることは、申す迄もないことであります。然し今度の動亂狀態が何もそんなに新しいことでないことも之また事實であります。

既に二十年も前になりますが、一九一九年の丁度今頃、私は「スイッツル」に居りました。御承知の通り山國でありまして、日本で申しますと、信州のやうな所でありますが、その頃やつと世界動亂が鎭まつたといふ時期でありました。それから二十年餘經つて居ります。その二十二年前を見ますと、相變らず世界は現在以上の動亂の時

期にあつたのであります。その時もみんながもう世界はひつくりかへるのだとか、世界の終りだとか、もう今度は世界歷史の新しい頁が開けるのだとか、いろいろなことを言つて居りました。恰度、現在言つてゐるのと大差はない。人間の智慧はさう大した變りはないのであります。二十二年この方、同じやうなことを言つてゐるのだといふことになる。でありますから、現在世界の動亂であるとか、變轉時期であるとかいふことを聞きますと、私は二十二、三年前の事を思ひ出しながら、また同じ事を繰返してゐると思ふのであります。

然しその間に何等か異つたことはないのだらうか、といふことを考へなければならぬ。一九一四年に始まりまして、一八年に終りました前の大戰の時の世界動亂と、三年前から始まりました、日支事變をもとにして、昭和十四年の九月から始まつた「ポーランド」と「ドイッ」の戰爭、次で英佛對獨伊といふ現在の戰爭、この現在の動亂を考へる上に於きましては、勢ひ今から二十何年前の動亂と異ふのだらうか、或は同じ

だらうかといふことが、私の頭に浮んで來るのであります。同じ事もありますが、異つたこともあります。その異同を考へますと、自然、今回の吾々が言つてゐる世界動亂であるとか、世界の變轉期であるとかいふ意味が、明かになりはしないかと思ふのであります。

何時の機會でも人間は自分の住んでゐる時代が一番善い、一番大切である、又一番意味があると思つて居ります。極く泰平の御代でも、今は世の中が變る時だといふやうなことを申します。日本歴史でも、御承知のやうに、藤原時代の終り頃には、所謂末法時代といふことを考へまして、もう世の中は亡びる、佛樣が出來てから何千年になるので、聽て世界は亡びるのだと考へて居ました。藤原時代から平安朝の末期へかけては、只今のやうな動亂時期でなかつたのに、さういふことを考へてゐる。人間は自分の住んでゐる時が一番大切な時である、それが歴史で一番意義ある時だと考へる。尤もさうしなければ生活する價値もないかも知れませぬが、みんなさう考へる。現在

も二十年前と同じやうに世界動亂だと申します。その間に同じ事があるか、異ふことがあるかといふ點を考へて見ますと、私は多少今度は異ふ點があると思ひます。

この前も私は「ヨーロッパ」に居りまして、「イタリー」で戰爭が始まり、それから「フランス」に行き、「フランス」から「イギリス」に行き、戰爭が終る年、一九一八年には「スイッツル」へ行つて居つたのであります。そこで戰爭が終つたといふ有樣で、日本が加勢して居りました協商國側の國は知つて居つたのであります。また今回は日支事變が始まりまして間もなく上海に參りまして、南京が落ちた後に歸つて參りました。また昭和十四年は「ヨーロッパ」へ參りまして、もう戰爭が始まるといふ前の時も見ましたし、昭和十五年は四月から「ドイッ」に參つて居りましたし、また「イタリー」が參戰する時も見て居つたのでありますから、今度の世界の動亂の主な部面も、自分で見たのであります。

さういふ意味で考へて見ますと、何も他人の話ばかりでなく、また本に書いたもの

ばかりでなくして、自分で實際あたつたことを考へ合せて見ますと、どうも今度の動亂は前の「ヨーロッパ」戰爭とは多少異ふ感じがする。その異ふ感じを申上げまして、各人が自分でお考へを願ふ。私から一々これはかうだと申しませぬ。かういふことはみんなが寄つて考へて、どういふ風に異ふのだらうか、また果して私の申上げることが、正當であるかどうかといふことを、先づ考へて戴きたい。さうしてその結論は各人に出して戴きたい。いろいろな方面の結論が出ると思ふのであります。その結論に關しても、私は一々申上げませぬが、それから出る結論はどうか各人でお考へ下すつて、それを國家生活、或は社會部面の各方面に當てはめて、お骨折りを願ひたいと思ふのであります。

二　前世界大戰の本質

それでは、どういふところが異ふかといふことを考へて見ますと、この前の戰爭の

時は世界戰爭と申しました。戰爭の波及は北米にも及びましたし、東亞の日本にも及びましたし、南米諸國にも及んだのであります。然し日本は「ヨーロッパ」戰爭が始まりまして間もなく參加しましたし、また「アメリカ」は戰爭の終り頃に參加致しましたが、結局、日本の戰爭參加、並びに「アメリカ」の參戰といふことは、第二次的の重要さしか持つてゐなかつた。

御承知の通り、日本の參加は青島が落ちますと、それで終りであります。「アメリカ」はもう戰爭が終りかゝた時に、ちよつと入つて來た。澤山の軍隊を送つて來ましたけれども、軍隊の教練も出來ない中に戰爭が終つてしまつた。私は「アメリカ」の軍隊が「フランス」の戰線へ參りまして、一番はじめに「シャートチエリー」といふ所で「ドイッ」軍に敗れたことを知つて居ります。「アメリカ」の軍隊が教練が出來てない。そこで「ドイッ」軍に攻められて、四十キロも占領された。それで「アメリカ」の軍隊を訓練して、もう一遍盛り返さうといふ時に戰爭が濟んだ。でありますから、「アメリカ」

の參戰といふことも、世界戰爭全體から觀ると、第一次的でなくて、第二次的の重要さしか持つてゐない。何處が重要であるかと言へば、矢張り「ヨーロッパ」であつた。戰場も「ヨーロッパ」であるし、戰爭をして居つた國も「ヨーロッパ」である。結局、世界大戰と申しますが、「ヨーロッパ」の戰爭であるし、「ヨーロッパ」諸國間の戰爭であつた。偶々、其の波及が世界全體に及んだから、世界戰爭といふ名をつけましたが、「ヨーロッパ」の戰爭であつた。

それでは、「ヨーロッパ」の戰爭は何を目的として居つたか。「ヴェルサイユ」條約では、「ドイッ」に戰爭の責任があつたといふことを書いて居るのであります。然しこれは戰爭が濟んだ後から出た論據でありまして、實際はその通りには解釋できない。それでいろいろ研究して見ますと、要するに、「ヨーロッパ」の國の間で――當時の「ヨーロッパ」と申しますと、世界に於ける覇を唱へて居つた國家群、團體であります。精神的にも、物質的にも世界を支配して居つた。その「ヨーロッパ」の國の間では、「イ

ギリス」側が支配權を持つて居た。これに代つて、「ドイッ」側がその支配者になるといふ爭鬪に過ぎなかつたと思ふのであります。でありますから、英獨間の「ヨーロッパ」内に於ける覇權の爭奪戰――もう少し廣く申せば、「イギリス」か「ドイッ」か何方かゞ世界全體に於て覇權を握る、一番の國になるかならないかといふことが、この「ヨーロッパ」に於ける戰爭の根本意義であつた。これは極く簡單のやうでありますが、その點を深くお考へ下さいますと、いろいろな事がその中から出て來るのだらうと思ひます。

要するに、當時は精神的にも物質的にも、「ヨーロッパ」が世界全體を支配して居つた。或はその時代の狀況をはつきり御存じない方もあるかも知れませぬが、極東に於ても然りでした。然し現在は餘程變つて參りました。支那に於ても、現在は日本が絶對に勢力を持つて居りますが、當時は「ヨーロッパ」の國が、政治に於ても經濟に於ても、有力な勢力を持つて居つた。私どもが外務省へ入りました頃は、滿洲の問題に對

して「ロシア」とか「イギリス」が口を利いた。現在こそ日本と一身同體の國が出來て居りますが、その頃は滿洲に鐵道を敷くのでも、「イギリス」や「アメリカ」の同意を得なければ不可なかつた。またちよつと北滿の方へ行つて何か仕事をしようとすれば、「ロシア」の同意を得なければ不可ないといふ狀態であつた。斯の如く世界到る所に於て、精神的にも物質的にも、「ヨーロッパ」が世界全體を支配して居つた。その支配の中で誰が一番の覇者になるか、即ち從來「イギリス」がなつて居つたのが、今度は「ドイッ」がそれに代つてなりたいといふのが、前の世界戰爭の大きな意義ではないかと思ふのです。

であります從ら、何方が勝ちましても、結局、その影響は極く限られた範圍にしか及ばないといふことになる。若しあの時に「ドイッ」が勝ちましたら、必ずや「ドイッ」は英帝國の持つて居つた地位を奪つて、世界全體に號令することを考へたでありませう。それが出來なかつたので、相變らず英佛が「ヨーロッパ」の中に於ては覇を唱へる

ことになつたのであります。ところが、それに附隨しまして、いろいろな方面に變化が起つて來ましたけれども、その變化は偶發的であつて、戰爭の主なる點は、今申した英獨の間の「ヨーロッパ」に於ける覇權の爭ひ、隨つて世界全體に於ける支配權の爭ひ、これが前の「ヨーロッパ」戰爭の本質であつたと思ふのであります。哲學者の方とか、宗教家の方などは、他の見方をされるか知れませぬが、極く通俗に考へて、さう觀るのが一般的に分る、前の世界戰爭の意義だらうと思ふのであります。その結果、「ドイッ」側が負けて英佛側が勝つたといふことになつたのであります。

その當時は「イギリス」でも「アメリカ」でも、今度の戰爭は要するに戰爭を無くする戰爭である、また今度の戰爭の結果、世界の人類は新たなる生活に入るのである、世界歴史は新たなる頁を切り拓くのである、かう申して居りましたが、實際はさうでない。そんな事が出來ないといふことは、今申した戰爭の本質を御研究になれば直ぐ分る。前の戰爭に英獨間の覇權の爭奪といふ以外に意義があつたか。さうして「ヨーロ

ッパ」戰爭の性質が、英獨兩國間の覇權の爭ひであつたとすれば、さうして「イギリス」が勝つたとすれば、その間に何等新たな事は出來ないのが普通である。

英佛が勝つたのでありますから、當然政治上に於きましても「デモクラシー」の政治形態がよいのだといふことになりませう。さうすると前と變りつこない。經濟上に於てもさうであります。英佛側の經濟上の制度の根本組織である、自由主義の經濟、自由競爭の經濟、また社會主義者の言ふ資本主義經濟が勝つたのでありますから、それがよいといふことになる。さうすると、經濟方面に於ても、世界大戰の結果何等新しい事が出來ないといふのが當然であります。同樣に思想方面を御覽になつても分る。若し、「ドイツ」が勝つて居りましたら、或は異つた思想方面に廻轉したかも知れない。英佛の勝利で前の戰爭は終つたのでありますから、思想方面でも同じことであります。相變らず「イギリス」「フランス」に發達致しました政治制度と、「フランス」革命で初めて生じました天賦人權主義、或ひは自由思想、また「イギリス」で起りました功利主

義といふ思想が根本になつて居ります。考へ方が變らない。これが變つたら世界戰爭の意義が別のものになる。然し世界戰爭の意義が、今申したやうに、英獨間の覇權の爭奪戰であつたとすれば、さうして「イギリス」が勝つたとすれば、當然また思想方面に於ても「イギリス」側の思想がよかつたのであるといふことになり、前と變りつこないといふのが當然の結論であります。

さうすると、前の「ヨーロッパ」大戰の本質が英獨間の覇權の爭ひであつて、政治上に於ても、經濟上に於ても、元の英佛側の持つて居つたものが繼續し、何等新たなものが出ないといふのが當然の結論でありまして、その戰爭の結果は、何等世界の歴史の上に新たなる頁を開くのでもなければ、また世界が新たなる生活に入つたといふことでもない。それが當然の結論であります。また事實その通りになつたのであります。

たゞ戰爭は人間が致しましても、人間の智慧といふものは極く淺はかなものであります。その智慧で豫想しなかつた事が起る。それはどの國でも、どの時代でも起り

ます。どんなに緻密に計畫を樹てましても、またどれほど緻密に計算を致しましても、世間の事柄は、必ず計畫通りに行つたと思つても、異つた事が生ずる。「ヨーロッパ」戰爭もさうであります。「ドイッ」は自分が覇權を握らうと思つてやつたところが、その通りに行かなかつた。英佛側は勝つたのでありますから、「ヴェルサイユ」條約であらゆる方法を以て「ドイッ」を引つ括つて、再び起てぬやうにしたのでありますが、最も大きな計畫違ひは何であるかと言へば、「イギリス」は、この戰爭の結果、「ドイッ」はやつつけましたが、その後に自分の思はなかつた「アメリカ」といふものが非常に大きくなつた。また東亞に於きましては、從來重きを爲さなかつた日本といふものが大きくなつた。これは英獨兩方とも覇權を爭つてゐる時には考へなかつたことであります。もう一つは英佛側は有ゆる方法を以て、實に細かく、大きな本になるくらゐな「ヴェルサイユ」條約といふものを作つて、「ドイッ」をあらゆる方法で縛りつけました。さうして再び「ドイッ」が起つことが出來ないやうにした。ところが、これは戰後の歷

史で分るのでありますが、その當が外れた。これは人間のすることでありますから、普通のことであります。

さういふ風に、前の世界戰爭は英獨の覇權の爭奪戰であつた。さうして英佛が勝つたので、決して新しい事が出來なかつたのでありますが、派生事實として、「アメリカ」の强大、極東に於ては日本の膨脹、また「ドイッ」を抑へようと思つたところの「ヴェルサイユ」條約が、その通り適用されなかつたといふやうな、いろいろな事が起りました。つまり「ヨーロッパ」戰爭の意義は、本來の意義よりは、派生的の意義が大きいといふことになつたのであります。

その三つの事を考へまして、大體「ヨーロッパ」大戰から現在に於ける世界の情勢の動きを見ますと、世界戰爭の本來の目的以外の派生事實から起つて來たところのものが中心になつて、「ヨーロッパ」戰爭以後二十年この方、世界の情勢は動いてゐるのであります。先づ英獨の間の覇權の爭ひの結果、思ひかけなかつたこととしては、「ソヴ

イエト」が出來たといふこともありませう。然し同時に「アメリカ」が強大になり、日本が強大になつた。また抑へつけようと思つた「ドイツ」が、その通りに行かなかつたといふ事實――これだけを御覽になつても、「ヨーロッパ」戰爭後の情勢が分る。一々詳しくは申しませぬが、これを各人でお考へになると、大體の情勢が御分りになると思ひます。

これは世界戰爭の本來の性質でない。本質から遠ざかつた派生的の事實が生じた結果であります。先づ世界の歷史は、そんな風に人間の淺はかな智慧で考へてゐなかつたところの、重大なる現象を生ずるやうになつて來た。然し本流は、今申しましたやうに、世界戰爭の本質は英獨の爭ひであつた。それで英國が勝つたのでありますから、もとの通り世界は續いてゐる。政治上に於ても、經濟上に於ても、文化、思想方面に於ても、矢張りもとの英佛側の思想なり、制度なり、考へ方が續いて來た。これは前の動亂の結果であります。隨つてそれから申しますと、當然世界歷史は何等新しい時

代に入つて來なかつた。入つて來ないのが當然である。先づ世界の國際情勢から觀ますと、世界全體の政治なり經濟なり思想なりは、以前からあつた思想が續き、また以前からあつた經濟が續き、また政治形體も以前からあつたものが續く。只今申しましたやうに、いろいろな派生的な事實の結果、少なからず影響を及ぼされた。變化を生ずることもあつたのでありますが、本流は相變らず戰爭前のままであるといふことは當然のことであります。さうして戰爭が濟んで二十年過ぎたのであります。

三　今世界動亂の本質

ところが、その二十年の間に、各方面に於て、前の戰爭の結果にも拘らず、戰爭前の狀態が實行出來ないやうな現象が起つて來た。その起つた事がつのりつのりまして、東亞に於ては日支事變となり、「ヨーロッパ」に於ては英佛對獨伊の戰爭になつたと思

ふのであります。さう致しますと、今回の動亂ももとの通りであらうかといふことに、當然考を向けなければならないのであります。

前の戰爭は、今申しましたやうに、世界戰爭と言つても「ヨーロッパ」が中心であつた。その舞臺に於いて行はれた、英獨間の覇權の爭ひであつたのでありますが、今度は少し異つて來た。先づ世界動亂のはじめは東亞に起つた。その點がこの前の戰爭と違ひます。「ヨーロッパ」から起つたのではない、東亞から起つた。而も日支事變は——私は、この際、何も日支事變の性質なり本質を講釋する考を持つて居りませぬが——結局、何も日本人が無暗に支那民族を殺すといふのではない。また支那の領土を全部とらうといふ爲めではなかつた。大きく觀ますと、吾々の考へてゐる考へ方と、支那の當時の政府の考へ方が異ふ。それが合致しなかつた。さうして抗日と申しましても、それは日本人が片ッ端から憎いから倒すといふのでない。だんだんと研究して見ますと、當時の支那を支配して居つた政府の人間の考へ方と、日本人の持つて居つた

考へ方の相違といふことになつて來るのではないかと、私は思ひます。この點は各方面で議論されてゐることで、私が此處で詳しく申す必要はありませぬが、その點をお考へ下さると、結局さうなつてゐるのではないかと思ふ。

さうでなくなれば、支那人をみんな殺すまでやらう、或は領土をみんなとつてしまはうといふことになるが、そんなことは何人も言はない。支那人が協力すれば、一緒にやらうといふのであります。極く平たく申せば、支那人と日本人の見方の相違である。この頃流行る言葉で言へば、世界觀の相違といふところから來たのだと思ひます。もう少しこの頃新聞あたりで書いてゐる言葉で言ひますと、「イデオロギー」から來た爭鬪であると考へるのであります。これは何もそんな難かしい言葉を使はなくても、物の見方の相違といふことである。結局、日本人と支那人の全體とは申しませぬが、支那の國民を支配じて居つた要路の人間の物の見方——その物の見方は他の言葉で言へば、孫文の言つた三民主義の物の見方だと、吾々は考へてゐる。その見方と、日本

の國にずつと長く傳はつてゐる傳統と申しますか、精神と申しますか、さういふ見方の相違、それが一緒にならなかつたといふことが、日支事變の大きな意義ではないかと思ふのであります。先づそこから出發してゐる。

更に今度は「ヨーロッパ」の方を觀ましても、今度の英佛と獨伊の爭ひは、先づ物の見方の相違、卽ち一方は政治形態から言へば「デモクラシー」、それをバックしてゐる思想方面から申しますれば個人主義、またそれを經濟方面に適應した經營形態から申しますれば、自由主義と申しませうか、いろいろな見方がありませうが、その一團の見方と、それに反對して起つた獨伊側の見方、單に政治方面から言ひますと、民主主義と異つた見方、また思想方面から申しましても、全體主義と申しますか——私はいま全體主義と言ひましたが、これが個人主義とどれだけ差があるかと云ふ點などを議論すれば六ヶ敷ですから、この際全體主義の基礎的のことは申しませぬが、兎に角、個人を中心にしないといふ主義、さういふ物の見方——「ドイッ」人は難かしい言葉を

使ひますが、所謂世界觀の相違、「ベルタンシャウング」の相違、さういふものが今度の戰爭の大きな原因を爲してゐるのでないかと思ふのであります。

今度「ベルリン」へ參りまして、「ドイッ」の連中に聞きました。成程「ポーランド」もうまく談判すれば、當然吾々の欲してゐる通りにとれたのだ、然しそればかりではない、今やつて置かなければ、當然起る問題だ、何となれば二つの見方の相違だ、どうしても兩立しない、去年起らなければ今年、今年起らなければ來年起るといふやうに情勢がなつて來てゐる、どうしてもやらなければ起る問題なのだ、かういふことを言つて居た人もありました。これは責任の地位にある人に聞いたのではありませぬから、どれだけ眞實であるか知りませぬ。また それがどれだけ眞實かといふ詮索をしなくつてもよいのであります。今度の戰爭はどうしても已むに已まれないので、それは人生觀の相違と申しますか、或は物の見方の相違といふことが、根本の原因を爲してゐるのであらうと思ひます。

英佛に致しましても、私は昭和十四年も參つて、よく國内情勢を知つて居ります。「ドイッ」と戰をやれば勝つ見込みは少い。單に物質上の方面から申しましたり、政治上の利害から申しますれば、英佛側は「ドイッ」と何等かの方法で妥協した方が得である。それを知つてゐるにも拘らず起つたといふことは、「ドイッ」のやり方と英佛の物の見方に根本の相違がある。どうしても根本に於て一緒にやつて行けないといふところがありますから、この際自分等を護らなければ、自分が生きて行けないといふことが、戰をしても勝てぬといふことは考へてゐても、英佛側を起たした大きな原因だらうと思はれます。これは損得の問題ではない。損得を超越した人生觀と言ふか、世界觀と言ふか、吾々が依つて以て存在する根本觀念、それが兩方の間に大きな差があつたといふことが、戰爭を起さしめた原因だと思はれます。

前に申した樣に、東洋でもさうであります、また「ヨーロッパ」に於ても、今回の動亂の原因が、或る國家の間に覇權を握らうといふ爭鬪でなくして、どうも世の中の

見方が異ふ、人生に對する根本見解が異ふといふことから、今度の動亂が生じてゐる。これが今度の世界の動亂の最も根本的な意義ではないかと考へるのであります。

これは、勿論、みんなが言つてゐることでありまして、私の申すことが何も事新しくはないのでありますが、私は昭和十四年「ヨーロッパ」へ參りましたし、また昭和十五年も四月の終りから五月の十二、三日まで「ドイッ」に居りまして、その間「オランダ」「ベルギー」を廻つて參りました。五月十三日に「ベルリン」を發ちまして、「スイッッル」を經て「イタリー」へ參り「イタリー」に六月まで居つたのであります。その六月の終りまでゐる間に、「バルカン」諸邦、「スイッッル」の一部を廻つて見たのであります。さうして自分が旅行致しますと、今度の動亂が前の時と全然異ふ。つまり人生觀の相違といふことである。例へばそれが如何に利益の問題を超越してゐるかといふことの例を、明かに到る所で見るのであります。

一例を申しますと、「スイッッル」に參りました。「スイッッル」は中立國であつて戰

爭をしない。この前の戰爭の時は、「スイッツル」には「ドイッ」側からも澤山人間が這入つて居ります。「イギリス」或は「フランス」側の人間も這入つて居りました。所謂宣傳の競爭場、情報の取り場所、かういふので「スイッツル」には大變澤山の外國人が這入つて居りました。御承知の通り、「スイッツル」には產業もありますが、外客の旅行で毎年何億といふ收入がある。それが國收の一部を爲してゐる。それでありますから觀光事業は「スイッツル」では產業の最も大きな一であります。この前の大戰の時は澤山の外國人が這入つて來て、「スイッツル」にはうんとお金が入つた。でありますから、「スイッツル」も成金になつた。今度も多分さうだと思つたところが、今度は全然違ふ。「スイッツル」くらゐ外國人に敵愾心を持つてゐる所はない。

私は「ドイッ」から直ぐに「スイッツル」の國境へ入りますと、稅關の官吏が來て荷物を見る。それから私はかういふ身分の者であるから荷物を出さないと言つたところが、「ナニ、馬鹿野郎、出せ」と言ふ。私は「一體何だ、『スイッツル』人は外國人に對して

もう少し丁寧な言葉を使ふのが國是ぢやないか」と言つたのですが、待遇が昔と非常に違つて居ります。何だか「スイッツル」人は氣狂ひになつたのではないかと思つた。それから憲兵が來て、旅券を見せろとか何とか煩さく言ふ。それで「何だ、お前の國は戰爭をしてゐるのか」と言ふと、「いや、戰爭をしてないけれども、何時戰爭をするかも知れない」と言ふ。これは餘程違つてゐるなと、私は前の「スイッツル」を知つて居りますから、喫驚した。それから汽車に乘ると、乘換る度に檢査をされる。宿屋へ行つても三日以上は泊れない。この前の大戰の時に參りました「ジュネーブ」「ベルン」は、大變な外國人で金がうんと這入つたのに、今度は「ジュネーブ」の「ホテル」がガラ空きです。さうして「スイッツル」は外國人に對して敵意を示してゐる。國富の一つを爲してゐる觀光事業が全然ゼロです。

それで私はいろいろ調べて見ました。またいろいろ訊いて見ました。何故貴方の所は外國人を入れないのかと言ふと、それは、貴方の言ふ通りに、觀光事業は「スイッ

ツル」の國富の一つだ、それを犧牲に供せなければならぬ事情があるのだ、何故かといふと、この「スイッツル」に外國人が這入つて來る、その外國人の宣傳から來る思想上の危險——御承知の通り、「ドイツ」は第五列といふものを持つてゐる、それがだんだんと思想的に、「ドイツ」のさういふ思想狀態、「ドイツ」の經濟狀態が浸み込んで來たらどうします、「スイッツル」の國家の存在に危險性を感ずる、またその反對に、「イギリス」が來てプロパガンダをやつたらどうする、「スイッツル」國家が危險になる、即ち吾々の國家は攪亂をされて、國家が存在しなくなる、それを考へると、これは損得は考へられないので、外國人の入國を禁止したといふことであります。

それを以て見ましても、要するに、今度の戰爭の本質が「スイッツル」といふ國にも明かに現はれてゐる。國家の損得とか利害關係から申しますれば、「スイッツル」は外國人をどんどん入れて、觀光事業を盛んにし、兩交戰國から金を取ることが、「スイッツル」の國富を增す所以であるし、また「スイッツル」は中立國でありますから、外國

人が澤山入つても國內の治安を護れる。それを止めて利害を超越して、外國人を入れることを止めたのも、今申したやうに、「ドイツ」の人間が入り、「イギリス」の人間が入り、宣傳をして、「スイッツル」の文化の基礎と異つた傳播をすれば、そこに國民の生活上に迷ひが起き、思想上の混亂が起きれば、富は增しても國が亡びる。國家の存立の危險がある。その爲めに今回は「スイッツル」も國富の根源である觀光事業を止めてしまつた。かういふことである。それを御覽になりましても今度の「ヨーロッパ」の戰爭は前の歐洲大戰とは異なつて居るとの感を深くしたのであります。

四、世界の新體制

どうも今度の動亂は前のと異ふ。何時濟むか知りませぬが、さう簡單に濟むまい。電擊戰で速戰卽決と申しましたが、なかなか簡單に行かない。のみならず前の時にも

終りはさうでありましたが、單に武力戰とか、經濟戰だけでない。思想戰が非常に重要になる。さうなります結果、この動亂が終りました後は前の世界戰爭「ヨーロッパ」戰爭と異ひまして、世界の全體に亘つて新しい時代が來るのではないか。全然新しいとは申しませぬ。時代はずつと續いて居りますから、目立つてはどうか知りませぬが、前の「ヨーロッパ」戰爭の後の如く、その戰爭前の思想なり、經濟なり、政治形態が續くのではなくして、現在の世界動亂が、世界觀といふやうな人生の見方が違つてゐる國家群の間の爭鬪でありましたゞけに、前のと同じやうなものでない。必ず前の時代とは異つた世の中の見方、政治の仕方、經濟の仕方が來るのではないかといふやうなことを想像しましても、あまり違つた考へ方ではないと思はれます。諄々しくなりますが、前の戰爭の本質、それから生じました戰後の形勢、またそれに較べまして、今回の世界動亂の本質の差といふことを見ますと、當然、今度の世界動亂後には、前の世界戰爭の後と違つたものが來るといふことを考へても、あまり間違ひはないのでは

ないかといふ風に考へてゐる次第であります。

さう致しますと、普通の人が言つてゐる言葉でありますが、今度の動亂後の世界の歴史は形容的に云へば、新しい頁に入るといふことになつて來るのではないかと考へられるのであります。勿論、これは現在の想像でありますから、どうなるかといふことは、もう少し時が經つて見ないと分りませぬが、さういふやうな氣がするのであります。それは前に申しましたやうに、前の戰爭と今度の動亂とが異ふといふことから來る結論であります。

それだけ申上げますと、それではどうしたらよいだらうかといふことは、今申したことから、當然お分りになるだらうと思ひます。若しこの世界の動亂の本質、意義が、今私が申したやうなことであつて、その結果この動亂が終れば、現在吾々の住んでゐる時代と異ふ時代が來るとすれば、當然、國家も國民もそれに適應した處置を採らなければならぬ。またそれに相應した心構へを持ち、新しい時代に處して指導して行く

ことが當然であらうと思はれます。この點を日本の國民がよく觀なければ、新しい時代に處して、指導的な役割をするといふことは、到底出來ないといふことになるのではないかと思はれます。

新體制運動が盛んになり、大政翼贊運動が起りまして、いろいろなことを申しますが、當時東京あたりでは、この時世に於てバスに乘り遲れては困る、といふことを言ふてゐる人がありました。さういふ人は單に現在のことばかりを觀てゐるからで、現在世界に於ける動亂の狀況を觀、動亂後の態勢を考へ、日本の現狀を觀察するとどうなるでしやうか。今日問題になつて居る大政翼贊會の運動は、その一つの現はれに過ぎない。その現れが世界的に前の時代と異つた世界の新體制である。新體制の思想が世界の態勢とすれば、日本にも起ることは當然である。何となれば、世界は澤山の國家が集つて作るものである。今度の動亂が前の動亂と異つてゐる後に來るべきものは吾々の住つて居る時代と異ふものである。善いか惡いか分らぬが、異つたものであ

る。かうなれば、國內に於ける各般の體制はもとのままではいかぬといふことは當然である。それが政治面に現はれましたものが、大政翼贊運動と名を附けたものである。

さう御覽になりますと、何も當時東京あたりで周章ててゐたやうに、バスに乘り遲れては困るといふやうなことを、吾々は心配する必要はない。吾々で作つて行かう。否、現在世界動亂の意義がさうであれば、來るべき時代は吾々が作つて行くのである。各國で各々作り方が異ひませう。人種的な異ひもありませう。また各國の傳統も異ひませう。國是も異ひませう。また各國とも、各國民とも、各々異つた雰圍氣と異つた風土に依つて、來るべき新しい社會に卽應した體制なり、國策なりを定めて行く。

日本も然り。吾々はこの動亂が終つた後に、異つた世相新しい時代が來るとすればその時代の方向を考へ、その時代に卽應して、世界を指導して行かう、東亞を指導して行かうといふならば、吾々の持つて居りました傳統なり、吾々の持つて居ります風

土なり、また吾々の仰いで居ります國體なりを考へて、その基礎の上に、如何に新しい文化を作つて行くかといふことを考へることは當然であります。またそれを考へなければ、日本將來の發展は六ヶ敷しい。大政翼贊運動を此點からお考へになれば、當然吾々はどういふ風にして行くべきものか、また大政翼贊運動を何方へ引張つて行くかといふことは、當然、お考へになり得る事と思ふのであります。

さういふ意味で、たゞ新しい情報とか、新しい際物的の考へでなくして、世界はかういふ風に動きつつあるのであるといふことを、頭に置いて下さいまして、その立場から、さういふ意味から、世界もさうだ、日本もさうなつてゐるのだ、大政翼贊運動とはそれだ、といふ風にお考へ下すつて、その頭から總てのものを判斷する、吾々は日本の國體の下に於きまして、風土を考へ、傳統をもとにした、新しい文化を作つて行かうといふのが、これから課せられたる吾々の任務であります。またそれをやらなければ、東亞の指導は出來ない、世界を指導することも出來ない、かういふことをお

考へになつて、その觀點から常に物を判斷されんことを望みます。常に大きな眼點から物を考へ下されば、總ての事に關して參考になりはしないかと思ひます。その各方面に於ける適用とか、またその國民の生活の上に於ける現はれ、また國際情勢に於ける現はれ方等々、詳しい事を申上げれば限りがありませぬが、極く大體の心構へ、また頭の置き所、物の見方の中心點を、何處に置かれればよいだらうかといふことを、洵に大雜把でありますし、またこの頃流行る哲學的の難かしい言葉を使ひませぬで、極く平易な言葉で申上げました次第であります。

或は淺薄過ぎたかも知れませぬが、決して難かしい言葉を使つたからと言つて物は難かしくない。大體人間の智惠は同じことでありますから、平易に申上げたことでも難かしく言へます。また私が筆を取つて書いたら、難かしい事を書くかも知れませぬが、そんなことは第二である。問題の第一は動きである。その動きに立つて世界的な大きな役目を果す上に於ては、この勿體ない國體を明かにしまして、吾々の祖先の傳

統をもとにして、その上に新しいものを作つて行かなければなりません。

〔完〕

日本外交の精神

白鳥敏夫

目次

一　日獨伊同盟の根柢……（三九）
二　歐洲新秩序と日本の方法……（四〇）
三　日本精神と獨伊の世界觀……（四八）
四　世界新秩序の發展と日本……（五六）

一　日獨伊同盟の根柢

日支事變の三年この方、國民も日本の外交に非常に關心を持つて來て居りまして、——事實を特に申上げないでも無論御承知のことゝ思ひまするから——日本の外交に關聯して、實は自分の專門の分野でもございませんけれども、多少文化、或は思想といふことに關聯をつけて、今日の日本の外交の問題を少しく申上げてみたいと思ひます。

日本の外交の問題と致しましては、昨年出來ました所の日獨伊同盟、これが帝國對外國是の樞軸となつた譯でありますから、これを中心としてお話を致しませう。

日獨伊同盟と一口に申しまするが、この條約は、私の見る所では、從來の强國間の合從連衡といふものと多分にその趣を異にして居るやうに考へます。强國が互ひに覇

を爭ふ、その關係に於て利害の一致し、或は背反するといふ立前から合從連衡をやるといふこととは、多分に趣を異にして居る點があると私は考へて居ます。勿論今日の世界に於て、日獨伊三國の利害が一致して居るといふことはその通りでありまして、又その利害の一致があればこそこの同盟も出來たといふことも申上げられるのであります。のみならず、この同盟の實際の效果も從來の同盟と同じやうに、三國が政治上、經濟上、及び軍事上、必要な場合協力をするといふ點が條約の重要なる部分であるといふことも勿論であります。併しながら、唯それだけならば、從來の覇道的同盟條約と聊かも違はんのであります。この條約はその前文にも謳つてあります通り、從來の國際間の取極とは頗る面目を異にして居る。御承知の通り、萬邦をして各々その所を得せしめる、これが人類平和の前提條件であると謳つてあります。のみならず獨伊及び日本は、それぞれの分野に於て、關係地方の國民の共存共榮を圖ることを念願としてゐる。從來の國際條約に斯ういふ思想が盛られたことは、私の記憶する限りに於て

はないのであります。

彼の國際聯盟だとか、或はワシントン不戰條約といふやうなものも、世界の平和を謳ふ點に於ては同じでありませうが、併しながらこの聯盟規約とか、或は不戰條約の時代に於ては、依然としてこの世界が自由主義的な宇宙觀によつて支配される。これを端的に申せば、ヨーロッパ戰爭によつて有利になつた國々が、その有利な立場を永續させやうといふために出來た。

三國の條約をこの英米等の自由主義陣營から言はしめれば、これは物を持たない國が結束して切取强盜をやるのだ、持つた國を打倒して彼等が取つて代らんとする陰謀である、斯ういつて居るのであります。

勿論世界の新秩序を作るといふのでありますから、物を持つた側、打倒される側から見ますれば、さういふ風に見るのは當然であります。我が國に於ても、かつてはこの英米デモクラシー諸國の言ふ所に耳を傾けて、獨伊といふものを正にその通りであ

ると考へた者が多いのみならず日本自身が、滿洲事變以來やつて來たことに就て英米が攻擊を加へて居る、その英米の攻擊に理由ありとする者さへ日本國内にあつたといふことを認めなければならないのであります。さういふ見方からすれば、三國同盟の前文の如きは、これは盜人の題目と見られるかも知れないのであります。

併しながら冷靜に今日までの世界の歷史の進展を吟味し、そして日本が滿洲事變以來やつて來たこと、ドイツがこの十數年やつて來たことを公平に考へるならば、吾々はこの三國同盟の謳つて居る精神が、これこそ新しい時代の精神を代表するものであるといふことを斷言するに憚からんのであります。

殊にこの三國同盟の前文は、日本の肇國の精神をそこに盛つたものであるといふことが言へると思ふのであります。あの前文は日本の原案でありまして、獨伊側でも一言一句もこれには修正せずに受容れたのであります。條約が出來まするとと同時に、畏くも御詔勅が下されたのでありまするが、その御詔勅に同じく「萬邦ヲシテ各々其ノ

所ヲ得シメ」といふことを仰せられ、「大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一宇タラシムル」——勿論これは御承知の通り日本建國以來の聖謨でございまするが、この今回の御詔勅のやうに極めて明瞭にありますのは——皇祖皇宗以來の御皇謨が示されたことは、非常なる大きな意味を持つことではないかと思ふのであります。

從來、八紘一宇といふことは、屢々日本人によつて唱へられた。支那事變以來これは戰爭の標語として何人も口にしたのでございますが、畏くも　上御一人からこの言葉を改めて國民に宣示遊ばされたといふことは、國民として非常なる大きな決意と覺悟とを固めなければならぬのではないかと思ふのであります。

神武天皇の御即位の際、「八紘ヲ掩ウテ宇ト爲ス」と仰せられた。勿論その御精神は地球人類を一家とするといふ大きなる御理想ではございまするが、その後二千六百年、世界は隨分變つて居る。今日の世界に於て物質力から申しましたならば、日本は必らずしも世界を一擧に固めて行くといふ實力を持つて居らんと私は思ふのであります。

そして目前相反する所の陣營が鎬を削つて戰つて居る際に、「坤輿ヲ一宇タラシムル」と仰せられた。洵に有難い御詔勅であると考へるのでありますが、これを以て見ても、日本の八紘一宇といふものが、從來の、殊に日本の敵側が誣ひる所の世界統一、或は覇道の確立でないことは申すまでもないのでありますが、この肇國の大精神、大理想が、いま 天皇陛下の御口づから仰せられた、而も、それが日獨伊三國同盟に關聯して仰出されたといふことから申しましても、今回の條約が決して現狀維持諸國のいふが如き、單なる覇道的の結合ではない、人類社會に恒久平和を持ち來さう、各民族をして各々平和安穩にその天命を全うせしめようといふ、大きなる精神によつて結ばれたものであるといふことは、疑ひの餘地がないと私は思ふのであります。

二　歐洲新秩序と日本の方法

從來日本では、ドイツ、イタリーといふものに對しての研究が、可なり不十分であつたやうに私は思ふ。特にこのナチ、ファッショの研究といふことに於て可なり今までなほざりにせられたやうに思ふのであります。勿論ファッショやナチの經濟政策、或はその政治機構といふものは、今日何人も知つて居るのでありますが、併しながらその背後に伏在する所の世界觀といふものに就ての研究なり、或はこれを正しく諒解するといふ努力が非常に缺けて居つたのではないかと思ふのであります。今日でもまだ、日本は全體主義ではないのだ、ドイツとイタリーと利害關係上結んだかも知れないけれども、日本の肇國以來の精神といふものと、獨伊の精神といふものは根本に於て違ふ、斯う云ふ人が澤山ある。

數年前イギリスの大使と話した時に、彼は、日本はドイツやイタリーとは全く相反する國柄ではないか、寧ろイギリスに近い國ではないか、斯う言つた。日本國内にもさういふことを考へる人が可なり多いのではないかと思ふのであります。それは成る

程ドイツやイタリーは物質的に惠まれない。從來所謂持たざる國として虐げられて來た。殊にドイツはヴエルサイユ條約に依つて最も苛酷なる條件を課せられたのでありますから、彼等の今日までの血の染むやうな奮鬪の跡には可なり無理な所がある。勿論戰勝國から强ひられた條約を文面通り守つて居つたのでは、到底これはうだつが上らんのであります。又ドイツがヒットラー指導の下に隆々として勃興して來るにつれ、その無力な時代に於て約束したこと、或は中途に於てヒットラーが天下に聲明したことを後から裏切つて行くこと、これ又私は實際政治の建前から見る時に、必ずしも深く咎むべきではないと思ふのであります。

最初ヒットラーはドイツの欲する所は、ドイツ民族の失つた物を回復するにあり、ドイツ民族の自決が根本の欲求であつて、これが達成せられれば、その上になんら領土的要求はない、と言ひながら、オーストリー、さうしてチエッコスロヴアキアのドイツ人の住んで居る所を回復したのみならず、チエッコを殆んど合併してしまひ、さ

うして更にポーランドに行つて、ポーランドを半分取つてしまつた。更にベルギーとか、或はノルウエーとかいふやうな國を侵して居る。ヒットラーの言ふことは實にあてにならん、と斯う言ふのであります。

併しながら、それは今日さう斷定することはまだ早いと思ふのであります。ヒットラーが、ヨーロッパに於て、如何なる新秩序を作るかといふことは、今日まだ明瞭ではありませんけれども、私は、第三帝國が、從來のヨーロッパの征服者の顰みに倣つて、ドイツ以外の諸國を、ドイツの版圖に組入れるといふことはやらんであらうといふことを確信するものであります。

ドイツ民族八千萬の結束こそは、これが所謂新ヨーロッパの中核をなすといふだけの確信を持つて居るのであります。隨つて彼等の民族的な誇り、その民族を益々向上せしめ、その威力を天下に及ぼして、このドイツ人を中心として新しい秩序を造らう——彼等も亦た一種の八紘一宇的な考を持つて居るであらうと思ふのであります。

これは健全なる有爲なる民族としては當然のことでありまして、ヒットラーのやうな統治者を得た有力なる八千萬のドイツ民族に、それ位の抱負があつても不思議ではないと思ふのであります。

併しながらナチの世界觀から見、又今日までドイツのやつて來たことを見て、私は彼等がヨーロッパに於て如何なる行き方をするかといふことに就ては、大體に於て日本が東洋に於てなさんとする所と殆んど一致するのではないかと思ひます。滿洲事變に於て日本が現狀維持諸國の囂々たる反對を押切つて、遂に滿洲事變を押通した。それは實に人類歷史上劃期的の出來事であつて、ドイツの如き指導者を持ち、又ヒットラーの如き世界觀を持つ者に取りましては、日本の作つた所の滿洲國といふものは極めて參考になつたらうと私は思ふ。

滿洲事變以來實際日本のやつて來たことは、ドイツにもイタリーにも常に模範になつて居りまして、彼等は聯盟脫退その他に就ても、常に日本のやつたことを參酌して

居る。日本の作つた滿洲國といふものこそ、ヒットラーあたりははたと手を打つて、これこそ世界の新しい行き方だ、新しい世界の秩序の芽ばえはこゝにあるのだ、といつて喜んだに違ひないと私は思ふのであります。

無論滿洲國を以て、デモクラシイ諸國は、あれは日本の傀儡國家であるといふ。日本はこれを露骨に併合する代りに、假りに滿洲國といふ獨立國を作つた、事實上に於ては日本の屬國だ、斯う言ふ。それは成る程まだ滿洲國も出來たてであり、世間の非難は必らずしも嘘でないかも知れません。吾々も一部の攻擊を甘受しなければならん點がないでもない。併しながら今後滿洲國が如何なる發達を遂げて行くか、日本と滿洲國との關係がどういふ經過を辿るであらうか、といふことに就ては、吾々としては極めて樂觀し得ると思ふのでありまして、この滿洲國の行き方、これを理想化したものが、新秩序の下の支那でなければならず、又新秩序の下に來るべき東亞の諸國でなければならんと思ふのであります。

これを如何なる名で呼ぶと致しましても、要するに從來の國際關係とは非常に違ふのであります。大東亞の地域に、今後幾つの國が出來るか知りませんが、吾々は、その諸國と日本との關係は、大體に於て滿洲國と日本の關係、これを更に醇化し、理想化したものでなければならんと考へるのであります。ヨーロッパは、新秩序を何と呼ぶか、ヨーロッパ聯盟と呼ぶかどうかは分りませんが、大體に於てドイッ及びイタリーと諸國との關係といふものは、從來の國際法の如く、絶對主權であるとか、或は民族の絶對的自決權といふものは、多分に修正されなければ新秩序は出來ないと私は思ふ。小國が稅關を設け、各別の貨幣を使用し、そして大國より生産費が餘計かゝつても獨立の工業を持ち、不必要な軍備を持つといふことでは、新しいヨーロッパは到底出來ない。ドイッ及びイタリー指導の下のヨーロッパといふものは、そこに完全なる分業が行はるべき筈である。各國の間に生産の重複がなく、そこに無駄が省かれて、各々その國民性に適した、國土に適したものを造る。そして共通の貨幣を以て、圓滿

なる交換が行はれる。軍備の如きものも、勿論それは極度に制限されるであらうと私は思ひます。

今日までの世界の標準に照して見ると、それは卽ちドイッのヨーロッパ征服ではないかと斯う申すのであります。成る程、獨立國として獨自の軍備を持たぬといふことこれは大きな問題であると考へられるかも知れない。併しながらあの狹いヨーロッパに於て、小國が軍備を持つたがために、果してその安全が保たれて來たかといふと、曾てさういふ事實はない。軍備を持つたればこそ、彼等は從來も屢々非常な慘苦に投入れられて居る。今日迄のヨーロッパの諸國は、例へばベルギーにしろ、オランダにしろ、ノルウエーにしろ、何れも獨立國にして軍備を持ち、さうして大國の操縱する所となつて、この戰爭のみならず、常に戰爭ある毎にこれに引入れられ、或は間接にその一面を擔當させられて來た。斯ういふ工合で、ヨーロッパに新秩序を作らんとするドイッが、如何なる宇宙觀の下に之を行はんとするかといふことが、ヨーロッパ數

億の人類のためには休戚の岐れる所であつて、非常に重要なる問題であると思ふのであります。

三　日本精神と獨伊の世界觀

この前の世界戰爭以來、ドイッに對する宣傳は、英米側によつて一方的になされ、それが無條件に受容れられたために、ドイッに對する不當なる誤解がある。日本に於ても之が信ぜられ、さういふ惡い國との提携は如何なものか、と不安を抱く向きもあるのでありますが、私はドイッ國民性といふものを、吾々がもう少しく冷靜に、そして、既に同盟國となつたのでありますから、寧ろ好意を以て研究もし、考へもしなければならんと思ふのであります。

この前の戰爭前に、ドイッには色々の分野に於て、所謂クルッール・キャンプ——

文化運動が起つたことは皆さんも御承知のことゝ思ふ。法律に於ても、經濟に於ても、歷史の研究に於ても、あらゆる分野に於てクルッール運動が勃興した。それはその當時の自由主義、個人主義的な西洋の文明に對しては、一つの謀反を企てたものであります。

併しその當時のドイッは、まだ一般の考へ方、卽ち政治も、經濟も、社會組織も、大體に於て個人主義的、自由主義的のものであつたが故に、その自由主義的、個人主義的の體制の下に立つドイッは、英米佛等の古い自由主義諸國、物質的の力をドイッよりも多く蓄えて來た所の諸國に、遂に負けたのであります。ドイッが負けたが故に、所謂クルッールの言葉は一つの嘲笑の語になつた。ドイッのクルッールかといつて、誰も彼も馬鹿にしてかゝつたのであります。戰爭に負けたのであるから、ドイッのクルッール運動は實にみぢめなる打擊を受けた。

然るに、この十數年來、ヒットラーによつて起された所のナチ革命運動といふもの

を以て、ドイツが戰爭に負けて非常なる苦境に陷つたがためにあゝいふ運動が起り、そして成功し得たのだ、といふ見方は私は非常に間違つて居ると思ふのであります。このヨーロッパ戰爭に於て、一時挫折した所のクルツール運動が、新しくそこに勃興したのであると見なければならんと思ふのであります。

ナチス以前既にイタリーに於て起つて居りました所謂ファッショ革命といふものが、その質に於ては同じく一つのクルツール運動であると私は思ひます。これはその方面の專門の方々に研究をお願しなければならんのでありますが、私が狹い讀書の範圍に於て得た結論は、要するにドイツ、イタリーに起つた所のクルツール運動といふものは、彼等のいふ如く從來の西洋文明に對する反逆である、革命である、文明と文化との爭ひである、斯ういふ風に見るのでありまして、ドイツ人の中にもさういふ說明は常によくなされて居る。

從來の西洋文明なるものは如何なるものであるか。これは吾々が今日まで見た所の

所謂西洋の物質文明でありまして、我が日本に於ても、明治開國以來取入れた所の西洋文明といふものは、主としてこの自由主義的文明であります。これに對してドイツのクルツール運動といふものは、所謂復古運動であると私は思ふのであります。その思想、世界觀に於ては、古代のゲルマンの森の中の生活時代に還つて行く。人類が、物質文明によつてまだ色づけられない純眞なそして剛健な、古代人類の根本的インスチンクトに還つて行くのであります。

ナチ運動の擡頭した初めに、彼等の間には、吾々はバーバリヤンであるといふことを、大膽に放言した者も澤山ある。所謂シビライゼーションといふと都市生活を想出す。吾々はその意味の文明人でない野蕃人だといふことを、誇らしげに言うて居る者がある。これは無論物を極端に强調して言ふ表現法でありますが、從來の英米流の考へ方から見たならば、野蕃人であるかも知れない。英米人が最も尊いとして來たものを悉く否定する。個人の自由、或は西洋人が今日もまだ表面信じて居る所の「神」の觀

念も非常に違ふ。ヒットラーは、ドイツからはユダヤの民族によつて作られた宗教キリスト教を根絶すべきであると考へてゐるといはれて居る。そのためにこそヒットラーを以てアンチクライスト、人類の敵だといふやうにいはれて居る。ヒットラーの主張は、ユダヤ人の作つた神、ユダヤのキリスト教といふものは、これは人類の本當の幸福を齎らすものでない、各民族は民族の信仰を持たなければならない、といふのである。さういふ風にドイツの思想運動と申しますか、ナチ革命の本質は復古運動である。その復古たるや、而も例へばルネッサンスがギリシャに還つたといふやうなものでなしに、ルネッサンスよりも、ギリシャよりも以前、人類の初期の純無垢なる思想に還つて行く運動である、といふことが言ひ得るではないかと私は思ふ。

さういふ所に還つて行くといふことになると、このナチ式の人生觀が、非常に日本のものに近づいて來るといふことがいはれるのではないかと思ふ。人類の初期の生活態樣、或は物の考へ方といふものは、私は東西その軌を一にして居るのではないかと

思ふ。人類學上、人類が一元であるか、多元であるかは問題でありますが、無論私は原始人は考へ方に於ては大體に於て同じであつたと思ふ。日本に今日まで傳つて來て居る思想といふものは、この理想的な環境、この日本の大八洲の美しい自然に育まれて、外敵の侵入も受けず、極く純な形に於て今日まで保存されて來たものである。日本の肇國の理想、卽ち神代の日本の宇宙觀は、大體に於て今日まで完全に保存されて來てゐる。勿論今日までの過程に於て外來文化、外來思想によつて一部は蝕まれたであらうが大體汚損されずに今日まで傳つて來た。ドイツのナチ運動が、人間の本來性に還元すると云ふことに存する限り、その新しいドイツの思想が日本に近づいて來ることは極めて自然ではないかと私は思ふ。實は今日のナチの指導者の中には、日本の皇室、日本の國體、或は日本の神社、祭政一致の思想、さういふものの研究をして居る者がかなり澤山あるのでありまして、それがナチの世界觀を多分に動かしたらうと思ふのでありますが、併しながら、假りに彼等が日本と無關係にやつて來たと致し

ましても、この人類の本能に立ち還る所の復古運動がナチ運動の根本であるならば、それが東洋流、特に日本流になるといふことに別段不思議はないやうに私は思ふ。ドイツのことを少しく研究した者は、實際に於て今日のナチ・ドイツの考へ方が非常に日本に近いといふことに何れも驚いて居るのであります。

斯の如くドイツが日本に近づいたといふことは、一つはドイツの國民性がそこにあるといふことも言へるのであります。ナチ文化、ナチ世界觀が本來アングロサクソン等と異つて、日本的の行き方であるといふことに、これを求め得ると思ひます。さうであるから、日獨伊三國同盟の前文に謳つたやうな思想が、ドイツに於ては何ら無理なしにこれを受入れ得るのである。又條約の前文を以て單なる空文とは彼等は考へないで、實際あの通りに今後彼等の政策を指導して行くといふ決意であると私は考へる。本來の自分の本職でもない問題に少しく話し過ぎたやうでありますけれども、併しながら、やはり日獨伊今後の關係を考へるに當つては、この根本の思想の問題は非常に

重要であると思ふのでありまして、斯ういふことは、吾々のやうな素人にお委せになるより、諸君の方で大いにこれを研究して戴きたい。

日獨伊同盟を作つたに就きましては、日本の責任が一番重いと私は考へるのでありますが、それは何も、日本がドイツあたりに比べて實力が大きいから、主として現狀維持的勢力に日本が當らなければならんからといふのではない。寧ろさういふやうな役割はドイツが一手に引受けて居るかも知れない。併しながらこの新しい秩序、これをして舊秩序に墮せしめないがためには、日本の古來の思想を飽くまでも堅實に吾々が持して行く、のみならずこの吾々の精神をもつて獨伊を今後とも導いて行く、これを教化して行く、といふ覺悟が必要であると思ひます。英米アングロサクソンの支配した世界に比して、日獨伊全體主義の世界が人類の幸福といふものに貢獻し、地球に恒久平和を持ち來すに於て遙かに勝れてゐる、といふことを今後事實に證明しなくてはならない。若しそうでなかつたら、これは單に日獨伊の失敗といふことではなくし

て、日本精神、日本の肇國の精神が、その效果を發揮し得なかつたといふことになるのであり、御詔勅のお諭しにも反するやうな結果になるのでありますから、この點は日本國民として深く思を致さなければならんと考へるのであります。

四　世界新秩序の發展と日本

今後の東西の戰局及び新秩序運動が如何に進展して行くか、その成功の可能性如何といふことを極く簡單に申上げてみませう。

日獨伊の考へて居る世界の新秩序といふものは、アングロサクソンの舊秩序に取つて代るものであると私は解するのでありまして、ヨーロッパの方面に於ては、今日イギリスが辛うじてその日を過して居りますが、その敗退はもはや時の問題であらうと私は思ふ。ドイッが上陸作戰を決行すると否とに拘らず、イギリスとしては今の狀態

で長く行くことは私は出來ないと思ふ。そしてドイッが日獨伊同盟を作つたといふことは、單に英本土を屈服せしめ、そしてこれと妥協して行くといふことでなしに、最早英帝國そのものを解體しなければやまんといふ決意を示すものでありますから、世界の四分の一を占める所の英國の植民地といふものも、今後その歸屬を新たにしなければならんといふことになります。勿論イギリスの勢力は、一部米大陸に移るでありませう。併し永くドイッの率ゐるヨーロッパに對抗することは出來ん。結局獨英の戰爭が果して武力戰として今後幾年も續くかどうかといふことに就ては、米國の決意如何による次第でありますが、今日のアメリカの實狀を以てしては、私は武力を以てイギリスを援ける、卽ち大西洋を渡つてアメリカがドイッに戰爭をしかけるといふことはどうも考へられない。大統領選擧の關係からアメリカには當時色々强いことを言つた者もあり、如何にもルーズヴエルトが大統領に三選したら、すぐ戰爭に入ると考へた人があつたかも知れませんが、私は、ルーズヴエルトが强く言つたのは、寧ろ國論

を煽つて、自分の當選に都合の好いやうな空氣を作らう、國際關係は非常に險惡である、アメリカはいつ戰爭に引きずり込まれるかも分らん、といふ感じを與へる、さうなると八年間やつて外交にも慣れた大統領でなければいけない、不慣れな者を連れて來て國民を率ゐさせる手はない、といふ考を國民に起させるためであつたらうと見るのであります。

尤もアメリカは大體に於てユダヤ人初め財閥によつて政治をやつて來て居る。アメリカの輿論を動かすものは、實は新聞や、ラヂオや、さういふものを悉く握つて居る財閥がやるのだといふことは歴史が示して居るのであります。然るに、そのユダヤ人はヒットラーを不倶戴天の敵として居るのでありますから、アメリカが遂には戰爭に加入するといふことは考へられないことではない。併しそれはアメリカに取つて非常に危險なことではないかと思ふ。何れの途、アメリカの參戰によつて、形勢の逆轉することは考へられない。さういふ狀況であつて、大體ヨーロッパの新秩序は滯りなく

今後進んで行くのであるから、問題は、大東亞の新秩序は然らばこれと並行して進み得るかどうかといふ問題であります。

これは三國同盟に於ては、獨伊が大東亞に於ける日本の指導的の立場を認めるといつて居るし、ドイッは東洋に對して何ら政治的の野心はない、ドイッ人の事業を保護してくれ、そしてヨーロッパにない物資を保障してくれればそれで結構だ、斯ういふて居るのでありまして、要は日本の決意次第、日本が實力を以て大東亞の新秩序建設、アジア民族の解放といふことをやり遂げるならば、無論彼等はこれを歡迎もし、又援助もする。殊にアメリカが武力を以てこの日本の新秩序建設を妨げるに於ては、獨伊は同じく武力を以て日本を援けるといふことになつて居るのであります。但し日本自身が働かなければならない。條約が出來たからといつて、何もせんでは、これは要するに何にもならないことになるのであります。その邊は、今日の日本が、三年餘り戰爭をして更に又南に武力進出が出來るかどうかといふ問題になるのでありまして、簡

單なる結論はなかなか得られないと思ふのであります。さういふ決意をする前に先づ大陸方面の情勢を整へて行かなければならん。日ソの關係を調節して、さうして日支事變を一日も早く片づける。それが出來たならば日本としては安心して南の方に進出出來ることになるのでありまして、これらは今後の日本の實際の政策にも大きな關係のある問題であるから、私の個人の考として餘り具體的に申上げんのがよからうと思ひます。唯、大きく結論として申上げますならば、私は大東亞新秩序といふものが必らず出來るものであると確信するのであります。そしてこれを妨げる力といふものは地上にはない。

この大東亞新秩序が出來るか出來ぬかは日本民族の決意次第である。今日國際の情勢といふものは、日本の大東亞新秩序建設に適した狀況に向ひつゝある。ただ國民がそこに目醒め、先づ國内の體制を改めてかゝらんと、今日のまゝでは、これは不可能である。

本來日本は根本に於ては、醇乎として醇なる全體主義であり、萬古不易の國體を有するのであるが、この五、六十年、西洋文明の弊を受けて、自由主義的の思想に蝕まれ、まだその國内體制が整はない中に支那事變が起つて來た。日支實力の比較から申して、日本の情勢が若し國體のまゝなる姿になつて居つたならば、支那事變の如きもつと早くすんで居つたであらう。これを吾々が持て餘して來たやうな嫌ひのあるのは、私はなんとしても國内體制が崩れて居るから、國民思想が墮落——とは申しませんが、一時迷つて居つた、といふことに主なる原因を認めなければならんのであります。して、今日それを急速に改めるのでなければ、この上更に南方の廣い領域に亘つて日本が新秩序を作るといふことは、どうしても出來ないことであらうと思ひます。問題は、今日目前物資が足りないとか、或は經濟がどうとか、金融がどうとかいふやうな問題ではないのでありまして、要は國民が大きく自覺をする、即ち自分自身を發見する、日本自身の開闢以來の根本理念、國體の本義、これに本當に目覺めて行く、これ

が總ての出發點でなければならんと思ふのであります。

若しそれが出來るならば、經濟がどうの政治のやり方がどうのといふ問題は立どころに解決出來るべきものであらうと思ひます。殊にドイッなどによつてまざまざとその例を示されて居る。ドイッがこの七年間にあれだけの絶大な威力を示して來たといふことは、ドイッ民族の根本の魂、昔のドイッの魂に還つたといふことに根本の原因があるといふことを考へるならば、日本の目前の內外の問題も、根本は精神の問題である。廣い意味ではなしに、純粹なる意味の文化、ドイッ語のクルッールの問題である。吾々は日本クルッールといふものに目覺めなければいけない。これが今日の日本の最大の急務であると思ひます。

〔完〕

附記

本書は日本文化中央聯盟主催第六回「時局と國民自覺」指導者講習會に於ける伊藤述史氏並びに白鳥敏夫氏の講演速記錄を兩氏の校閲を受け編輯せるものである。

世界新秩序と日本の外交

（國民自覺叢書第九編）

昭和十六年五月十日印刷
昭和十六年五月十五日發行　定價五拾錢

東京市麴町區內幸町二丁目大阪ビル新館
財團法人日本文化中央聯盟內
編輯兼發行人　田口章太

東京市京橋區銀座町二丁目十六番地
印刷人　篠倉政一

東京市京橋區銀座町二丁目十六番地
印刷所　第一印刷所

東京市麴町區內幸町二丁目一番地ノ三大阪ビル新館
發行所　財團法人日本文化中央聯盟

賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・柳原書店

不許複製

415
222

終